

古今の季節

——学習院時代の三島由紀夫——

ここに掲げた表題のうち、副題の方は右文書院の編集部から与えられたものであるが、本題の方は三島君が昔書いたエッセイの題目をそのまま借りたものである。

三島由紀夫の平岡公威君が学習院に在学したのは、初等科六年、中等科五年、高等科三年、計十四年間である。私は、昭和十三年四月、平岡君が中等科二年に進級したばかりの所へ、国語教師として就任した。彼との交渉はそれ以来今日までつづいてるのであるから、数えてみるに、もう三十二年にもなる。その間にあったことで、彼がまだ学習院に在学していたころに限っても、書きたいことはいろいろあり、そのいくつかはすでに書いたことがあるが、ここでは今まで書かなかったことを一つだけ書きとめておくことにする。

三島由紀夫のペンネームがはじめて用いられたのは、昭和十六年九月号の『文藝文化』に、「花ざかりの森」が掲載されはじめたときである。初回が載った雑誌の後記に、同人の一人故蓮

田善明は、平岡公威という本名をわざと明かさないうで、ただ「われわれ自身の年少者」という言い方でこれを推称した。この「花ざかりの森」掲載が縁となつて、『文藝文化』同人の会合にも顔を出すようになった。そのうち、古今和歌集輪読会が、同人の蓮田善明・池田勉・栗山理一・私のほか、松島聰・本位田重美の諸氏も加わつて、月々開かれることになり、それにも三島君はほとんど毎回出席したように記憶する。私の住んでいた目白の学習院官舎が概ねその会場となつた。そのころは、実作・理論ともに、いわゆる万葉派全盛時代で、古今集はほとんど顧みられなかつたが、そういう時潮に抵抗する気持を、われわれは期せずして持ち合つていた。

春の歌から順次取り上げていったが、一回に一首ぐらいで終ることもあつた。一世を風靡していたアララギ派の写生論の用語では、到底捉えられそうにない古今集の本質を遠巻きにして、もどかしく口ごもりながら論議を交したことを、今も思い返している。そういう論議の輪の中で、終始目を輝かしながら、一人一人の発言に聴き入つていた三島少年の顔も鮮やかに浮んでくる。

三島君が、表題に借用した「古今の季節」Vという題のエッセイを『文藝文化』に発表したのは、昭和十七年七月であつた。その春、三島君はすでに高等科文科乙類へ進んでいた。この文章は、輪読会では言葉少なであつた三島君が、はじめて公表した古今集論で、今読んでも胸のすくような新しさを保つており、三島君の文学論の原型をここに見る思いがする。

この文章は、古今歌人の季節を待つ姿勢のなみなみならぬことを論じたもので、例えば、夏の

部の冒頭の歌、

わがやどのいけの藤なみさきにけり山ほととぎすいつかきなかむ

について、三島君はこのように述べている。

上の句には「とゝのひ」の流れがある。朗々と大河のやうにながれつゝ一つのとゝのひをつくり出してゆく。かうした「とゝのひ」は破られるべく用意されたとゝのひである。手花の玉があまたの光りの華になつてくだけるまへに、じゆうじゆうと煮えてゆくやうなあんなとゝのひである。それが「けり」で切れるとしばかに息をひそめてかなたをうかどふやうな空間がほんの一寸はさまれる。ここの空間は優雅な「待つおもひ」にあふれてゐるといつてよいだらう。そこへ「山ほととぎす」の四、五句が嚙喰とひときわたるのである。古今集夏歌の巻はこのやうにしてひらかれる。

もう一箇所、この文章の結びの部分をあけてみよう。たまたま夏の終りの歌について述べたものである。

……夏は来たときのやうな清朗さを以てゆきすぎる。

なつと秋とゆきかふそらのかよひぢにかたへすどしき風や吹覽みくらん

もう襟もとをなでる風のすどしきにおどろきなながら、古今の人たちは雲の去来をじつとながめやつたのであらう。季節と季節とが、上下にゆきかふおほきなかどやいた雲のやうに、おほどかにいれかはるのを見たであらう。雲のゆきちがつたあとの穹は、掃かれたやうに虚しかつた。その底びかりのしたうるはしい青をおびた往還に、人々は自分たちをいざなふすみぎつたはかなさを感じたにちがひない。さうして秋風に目ざめた眼まなざしは、もう次の季節にむかつて、果敢かかんなまたこのうへもなく高貴な「待つ姿勢」を、とりはじめたのである。

一、二の箇所、アット・ランダムな引用であるが、すでにこれだけからも、読者は、三島君が古今集から何を感得しているかにお気づきであらうと思う。故友は、「花ざかりの森」の掲載にあたり、「われわれ自身の年少者」といったが、私は、十七歳の少年三島由紀夫が、われわれを乗り超えて、すでに遙か高い所にまで至っているように、△古今の季節▽という文章を読んだとき思ったことである。

(四五・七)